

第7回 優秀賞(銀の星賞)受賞作品

「くすの木のうちた」

大阪教育大学附属高等学校 2年 柳原 菜美佳



賢治のまちから
高校生★童話大賞

優秀賞へ銀の星賞

大阪教育大学附属高等学校 二年 柳原 栞美佳

『くすの木のうた』

どんどんのっし のっしっし
歩くよ歩く どこまでも
野越え山越え のっしっし
どこまで行けば 見えるのか
わしがまだまだ 若い頃
風に聞いた でかい海
仲間の反対 おしきって
吉野の山を あとにする
どんどんのっし のっしっし
歩くよ歩く どこまでも
見えたぞ見えた でかい海
広いぞ広い 青い海
果てが見えない すごい奴
わしはここで 根をはって
日がな一日 海を見て
ずっと大きな 木になって
波の話を聞いていよう

みどりの家から路地をへだてて左側に、大きなくすの木があります。いかつい太い幹、空に広がる大きな枝、そして地面を掴むごつごつの太い根っこ。

いったい何百年ここに立っているのでしょうか？ コンクリートで覆われた大阪で、ここだけは別世界のようにしんとし、赤いお社で守られています。おばあちゃんは、

「神さんの木やから手を合わすんやで。」

と、みどりに言うのですが、小さい時からみどりは、手を合わせて拝むより、木の幹に触れるのが好きでした。根っこを踏まないように注意深く幹に近づき、手のひらをくつつけると、堅いかつい樹皮なのに、驚くほど温かく優しい感じがします。満月の夜には、こんな歌も聞かせてくれます。

どんどんのっし のっしっし

歩くよ歩く どこまでも

大きな幹が震え、大きな枝がざわめき、木の葉が踊って歌います。楽しそうに、懐かしそうに。何故かみどりには、くすの木が風に揺れる音がこんなふう聞こえるのです。不思議なことに、歌が聞こえるのは満月の夜だけです。だから、みどりは満月の夜、二階の窓を開いたまま、歌を聞きながら眠るのが大好きでした。

「おはようさん。今日もいい天気やなあ。行ってきまーす。」

「ただいま。今日の数学のテストはやばかった。もう、真っ青。もっと頑張らなあかんわ。」

「やったー。レギュラーに選ばれてん！ 試合に出られる！ 応援してな。」

中学生になってもみどりは、変わることなくくすの木に話しかけています。クラブ活動で遅くなったある日のこと、いつもどおり、くすの木に「ただいま」を言おうとしたみどりは、木が銀色に光っているのに気づきました。まんまるくうるんだ朧月が、木のとっぺんにさしかかっています。思わず立ち止まったみどりに強い風が吹きつけてきました。

どんどんのっし のっしっし

だんだん海が遠のくよ

幹が揺れ、大きな枝がざわめき、木の葉がかすれた音をだしています。

寂しい悲しい のっしっし

海のかわりに 人が来る

一緒に遊べば 寂しくない

歌って踊って さあ遊ぼう

みどりは幹に駆け寄り、手のひらをくつつけました。とくん、とくん、いつもと同じ温かい樹脂。だけど、今日のくすの木は、泣いているように身体を震わせています。みどりが聞いたことのない歌詞でした。

どんだんのっし のっし

だんだん海が遠のくよ

寂しい悲しい のっしっし

海のかわりに 人が来る

一緒に遊べば 寂しくない

歌って踊って さあ遊ぼう

どんだんのっし のっしっし

暑い夏には 木陰だよ

寒い冬には 風除けだ

ありがとうの お礼には

赤い鳥居と おいしいお酒

歌えや踊れ のっしっし

わしはここで 根をはって

日がな一日 人を見て

ずっと大きな 木になって

人の話を聞いていよう

歌は続きます。

どんだんのっし のっしっし

帰りたいのさ 帰れない

寂しい悲しい のっしっし

仲間が切られて 一人ぼっち

話したいのさ 話せない

赤い鳥居と おいしいお酒

それがあっても 踊らない

人はどこへ 行ったのか

家はたくさん できたけど

夏も冬も 窓を閉め

人の暮らしが わからない

どんだんのっし のっしっし

歩いて吉野に 帰りたい

どんだんのっし のっしっし

歩き方が わからない

重い根っこが 邪魔をする

わしはここで 根をはって

日がない日 家を見て

喋らず笑わず 朽ちるのか

ひとり寂しく 朽ちるのか

みどりは、胸が痛くなりました。そうです。今、くすの木の下に人間が集まるのは、神社のだんじりが通る時だけ。何百年も生きてきた大きな木は、神様が宿る木とされて祀^{まつ}られているのです。赤い鳥居は手入れされ、きれいに掃除されるけれど、普段は、近所のおばあさん達がお賽銭とお水、お花を上げてお参りするだけ。きつと、くすの木がまだ若かった頃は、くすの木は神様の木ではなく、木の下に人がたくさん集まって、毎日楽しく過ごしたのでしょう。その頃は、くすの木にもたくさんの子孫や仲間が居

て、このあたり一帯が森だったのかもしれない。それなのにどうでしょう。くすの木の周りは、舗装された道路と建物で覆いつくされています。人は、暑い夏、寒い冬はエアコンの効いた部屋へ閉じこもり、秋や冬でも、くすの木が待っている子ども達は、テレビゲームや塾で外で遊ぼうとしません。今、くすの木はたった一人でここに立っているのです。

「堪忍な、くすの木さん。うち何もしらんかった。あなたには、いつもいろんな話を聞いてもらって、いっぱいお世話になってんの。うち、あなたの気持ち、考えたことなかった。うちになんかできることあるのかなあ？」

ザザザツ、バサツ

みどりの横に、大きな枝が落ちてきました。ふわりと香る緑のにおい。みどりは枝を拾い上げました。

「これ、どうするん？　うちにどうしてほしいん？」

みどりは問いかけましたが、くすの木は何も話してくれません。ただ、枝が大きく揺れ、木の葉が嬉しそうにさわさわと揺れているだけでした。家に帰ってもみどりは、木の枝をどうしていいかわかりません。とりあえず、大きなバケツに水を入れ、木の枝を水切りして挿しました。

翌日の放課後、みどりは歴史博物館へ寄り道しました。ここは、古代から今に至る大阪の歴史がわかるのです。エレベーターで最上階へ上がり、上から下へ大阪の歴史を辿ります。奈良時代、大阪の上町大地のすぐ近くまでが海であったこと、そこに難波の宮があり、中国や朝鮮半島との交易の玄関口であったこと、時代は下り、湿地帯だった大阪が水上交通の要所として、経済的に大発展し、「天下の台所」と呼ばれる位発展したことなどがわかりました。

「あの歌のとおりやわ。信じられんような話やけど、くすの木さんは、ずっと昔に海を見たくて、吉野からここまで歩いて来たんやな。それからずっと大阪を見てきたんや。神様の木になったって、一人じゃ寂しいんは当

たり前やわ。友達の木、植えてあげたいけど、うちは庭ないし、第一、くすの木さんみたいに大きゆうなる前に切られるわなあ。」

とほとほと家に帰ったみどりは、縁側でくすの木の枝を小さく分けて水に挿しているおばあちゃんを見ました。

「おばあちゃん、それ！」

「ああ、みどりちゃん、あんまり色艶がええ枝やから、挿し木にしてあげたら鉢植えができるかと思うてな。これ、うちの前のくすの木さんやろ？」

神さんがくれた枝は、大事にせんとな。」

さすがはおばあちゃんです。みどりは、おばあちゃんを手伝いました。一日水につけた小枝を今度は鉢に植えるのです。十個の鉢に植えられたくすに木の赤ちゃんは、家の前に並べられました。ここならお母さんのくすの木を見上げて大きくなることができます。夏が過ぎ秋になり、冬が来てまた春になりました。くすの木は、一本も枯れることもなく根を張って、子供のくすの木になりました。大きいくすの木が風に揺れると、小さなくすの木達も一緒に身体を揺らします。さわさわさらら・一緒に歌っているみたいです。大きな鉢に植え替えてもらったくすの木は、ずんずん大きくなっていきました。

夏休みの地藏盆の日、おばあちゃんに付いて、みどりもご奉仕に出かけました。

「みどりちゃん、お宅の家の前のくすの木、うちにも一鉢分けてくれへん？風が吹いたら、大きな神さんの木と一緒に歌ってるみたいにさわさわ、可愛いやないの。」

「あら、うちらも思うてたんやで。うちらにも分けてえな。孫にしつかり水遣りさせるからな。」

お隣の中島さんに駒井さん、高橋さんに渋谷さん、田代さん、鹿浦さんに西本さん、左岸さんに松岡さん、みどりの家の並びが全部です。

「よかったなあ、くすの木さん。皆、くすの木さんの歌はわからなくても、歌っているのは感じてくれていたんやで。一人ぼっちじゃなかったんやで。」
十個の鉢は、九軒の家にもらわれていきました。毎朝、それぞれの家の子供達が水を遣り、小さなくすの木を見上げるようになりました。いつからか、みどりの家とくすの木の間の路地は、くすの木通りと呼ばれるようになりました。

今、高校生になったみどりは、吉野の山に登っています。みどりの背中のリュックには、くすの木の孫になる苗木が入っています。

どんだんののっし のっしっし

帰りたいのさ 帰れない

そう歌ったくすの木に代わって、小さなくすの木を植えに来たのです。奥千本と言われる桜の木で覆われた山の奥に、立派なくすの木が群生している山がありました。みどりは、他の木の枝の影にならないように小さなくすの木を植えました。さわさわ、風が流れます。ざわざわ、木の葉が歌います。

どんだんののっし のっしっし

帰って来たんだ 来たんだよ

わしの子孫が のっしっし

おかえりおかえり 待ってたよ

わしの子孫を 頼みます

心配しないで 大丈夫

わしのまわりに のっしっし

子どもや孫が 増えてきた

人の子どもが 水を遣り

小さなくすの木 育ててくれる

大きな公園 できるんだ



わしの子孫が 根を張って

くすの木の森が できるんだ

どんだんのっし のっしっし

暑い夏には 木陰だよ

寒い冬には 風除けだ

ありがとうの お礼には

赤い鳥居と おいしいお酒

歌えや踊れ のっしっし

わしはここで 根をはって

日がない日 人を見て

神さんの宿る 木となって

人を守って暮していこう